

芥川龍之介

おぎん



お
ぎ
ん

元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙りや磔に遇わされていた。しかし迫害が烈しいだけに、「万事にかなない給うおん主」も、その頃は一層この国の宗徒に、あらたかな御加護を加えられたらしい。長崎あたりの村々には、時々日の暮の光と一しよに、天使や聖徒の見舞う事があった。現にあのさん・じよあん・ばちすたさえ、一度などは浦上の宗徒みげる弥

兵衛の水車小屋に、姿を現わしたと伝えられている。と同時に悪魔も亦宗徒の精進を妨げるため、或は見慣れぬ黒人となり、或は舶来の草花となり、或は網代の乗物となり、屢々同じ村々に出没した。夜昼さえ分たぬ土の牢に、みげる弥兵衛を苦しめた鼠も、実は悪魔の変化だったそうである。弥兵衛は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙りになった。――

その元和か、寛永か、とにかく遠い昔である。

やはり浦上の山里村に、おぎんと云う童女が住んでいた。おぎんの父母は大阪から、はるばる長崎へ流浪して

来た。が、何もし出さない内に、おぎん一人を残した儘、二人とも故人になつてしまった。勿論彼等他国ものは、天主のおん教を知る筈はない。彼等の信じたのは仏教である。禪か、法華か、それとも又浄土か、何にもせよ釈迦の教えである。或仏蘭西のジエスウイトによれば、天性奸智に富んだ釈迦は、支那各地を遊歴しながら、阿弥陀と称する仏の道を説いた。その後又日本の国へも、やはり同じ道を教に来た。釈迦の説いた教によれば、我々人間の靈魂は、その罪の軽重深淺に従い、或は小鳥となり、或は牛となり、或はまた樹木となるそうである。のみ

ならず釈迦は生まれる時、彼の母を殺したと云う。釈迦の教の荒誕なのは勿論、釈迦の大悪も亦明白である。(ジアン・クラツセ)しかしおぎんの母親は、前にもちよいと書いた通り、そう云う真実を知る筈はない。彼等は息を引きとった後も、釈迦の教を信じている。寂しい墓原の松のかげに、末は「いんへるの」に墮ちるのも知らず、はかない極楽を夢見ている。

しかしおぎんは幸いにも、両親の無知に染まっていな
い。これは山里村居つきの農夫、憐みの深いじよあん孫
七は、とうにこの童女の額へ、ばぶちずものおん水を注

いだ上、まりやと云う名を与えていた。おぎんは釈迦が生まれした時、天と地とを指しながら「天上天下唯我独尊」と獅子吼した事などは信じていない。その代りに「深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて甘くまします童女さんた・まりあ様」が、自然と身ごもった事を信じている。

「十字架に懸り死し給い、石の御棺に納められ給い、大地の底に埋められたぜすすが、三日の後よみ返った事を信じている。御糺明の喇叭さえ響き渡れば「おん主、大いなる御威光、大いなる御威勢を以て天下り給い、土埃になりたる人々の色身を、もとの靈魂に併せてよみ返し

給い、善人は天上の快樂を受け、また悪人は天狗と共に、地獄に墮ち」る事を信じている。殊に「御言葉の御聖徳により、ぱんと酒の色形は変わらずと雖も、その正体はおん主の御血肉となり変る」尊いさがらめんとを信じている。おぎんの心は両親のように、熱風に吹かれた砂漠ではない。素朴な野薔薇の花を交えた、実りの豊かな麦畠である。おぎんは両親を失った後、じよあん孫七の養女になった。孫七の妻、じよあんなおすみも、やはり心の優しい人である。おぎんはこの夫婦と一しよに、牛を追ったり麦を刈ったり、幸福にその日を送っていた。勿論

そう云う暮しの中にも、村人の目に立たない限りは、断食や祈祷も怠った事はない。おぎんは井戸端の無花果のかげに、大きい三日月を仰ぎながら、しばしば熱心に祈祷を凝らした。この垂れ髪の童女の祈祷は、こう云う簡単なものなのである。

「憐みのおん母、おん身におん礼をなし奉る。流人となるえわの子供、おん身に叫びを為し奉る。あわれこの涙の谷に、柔軟のおん眼をめぐらせ給え。あんめい。」

するとある年のなたら（降誕祭）の夜、悪魔は何人かの役人と一しよに、突然孫七の家へはいつて来た。孫七

の家には大きな囲炉裡に「お伽の焚き物」の火が燃えさかっている。それから煤びた壁の上にも、今夜だけは十字架が祭つてある。最後に後ろの牛小屋へ行けば、ぜす様の産湯の為に、飼桶に水が湛えられている。役人は互に頷き合いながら、孫七夫婦に繩をかけた。おぎんも同時に括り上げられた。しかし彼等は三人とも、全然悪びれる気色はなかつた。靈魂の助かりの為ならば、いかなる責苦も覚悟である。おん主は必ず我等の為に、御加護を賜わるのに違いない。第一なたらの夜に捕われたと云うのは、天寵の厚い証拠ではないか？ 彼等は皆云い

合せたように、こう確信していたのである。役人は彼等を縛めた後、代官の屋敷へ引き立てて行つた。が、彼等はその途中も、暗夜の風に吹かれながら、御降誕の祈禱を誦しつづけた。

「べれんの国にお生まれなされたおん若君様、今はいずこにましますか？ おん讃め尊め給え。」

悪魔は彼等の捕われたのを見ると、手を拍って喜び笑つた。しかし彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらしい。悪魔は一人になった後、忌々しそうに唾をするが早いか、忽ち大きい石臼になった。そうしてごろ

ごろ転がりながら闇の中に消え失せてしまった。

じよあん孫七、じよあんなおすみ、まりやおぎんの三人は、土の牢に投げこまれた上、天主のおん教を捨てるように、いろいろの責苦に遇わされた。しかし水責や火責に遇っても、彼等の決心は動かなかつた。たとい皮肉は爛れるにしても、はらいそ（天国）の門へはいるのは、もう一息の辛抱である。いや、天主の大恩を思えば、この暗い土の牢さえ、そのまま「はらいそ」の莊嚴と変りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつつともつかない中に、屢々彼等を慰めに来た。殊にそうい

幸福は、一番おぎんに恵まれたらしい。おぎんはさん・じよあん・ばちすたが、大きい両手のひらに、蝗を沢山掬い上げながら、食べと云う所を見た事がある。又大天使がぶりえるが、白い翼を畳んだ儘、美しい金色の杯に、水をくれる所を見た事もある。

代官は天主のおん教は勿論、釈迦の教も知らなかったから、なぜ彼等が剛情を張るのかさっぱり理解が出来なかった。時には三人が三人とも、気違いではないかと思う事もあった。しかし気違いでもない事がわかると、今度は大蛇とか一角獣とか、兎に角人倫には縁のない動物

のような気がし出した。そう云う動物を生かして置いては、今日の法律に違うばかりか、一国の安危にも関る訳である。そこで代官は一月ばかり、土の牢に彼等を入れて置いた後、とうとう三人とも焼き殺す事にした。(実を云えばこの代官も、世間一般の人々のように、一国の安危に関するかどうか、そんな事は殆ど考えなかった。これは第一に法律があり、第二に人民の道徳があり、わざわざ考えて見ないでも、格別不自由はしなかつたからである。)

じよあん孫七を始め三人の宗徒は、村はずれの刑場へ

引かれる途中も、恐れる気色は見えなかつた。刑場は丁度墓原に隣つた、石ころの多い空き地である。彼等はそこへ到着すると、一々罪状を読み聞かされた後、太い角柱に括りつけられた。それから右にじよあんなおすみ、中央にじよあん孫七、左にまりやおぎんと云う順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦の為、急に年をとつたように見える。孫七も髭の伸びた頬には、殆ど血の気が通っていない。おぎんも——おぎんは二人に比べると、まだしもふだんと変らなかつた。が、彼等は三人とも、堆い薪を踏まえた儘、同じように静かな顔

をしている。

刑場のまわりにはずっと前から、大勢の見物が取り巻いている。その又見物の向うの空には、墓原の松が五六本、天蓋のように枝を張っている。

一切の準備の終わった時、役人の一人は物々しげに、三人の前へ進みよると、天主のおん教を捨てるか捨てぬか、少時猶予を与えるから、もう一度よく考えて見ろ、もしおん教え捨てるると云えば、直にも縄目は赦してやると云った。しかし彼等は答えない。皆遠い空を見守った儘、口もとには微笑さえ湛えている。

役人は勿論見物すら、この数分の間くらいひっそりとなつたためしはない。無数の眼はじつと瞬きもせず、三人の顔に注がれている。が、これは傷ましきの余り、誰も息を呑んだのではない。見物は大抵火のかかるのを、今か今かと待っていたのである。役人は又処刑の手間どるのに、すっかり退屈し切っていたから、話をする勇氣も出なかつたのである。

すると突然一同の耳は、はっきりと意外な言葉を捉えた。

「わたしはおん教を捨てる事に致しました。」

声の主はおぎんである。見物は一度に騒ぎ立った。が、一度どよめいた後、忽ち又静かになってしまった。それは孫七が悲しそうに、おぎんの方を振り向きながら、力のない声を出したからである。

「おぎん！ お前は悪魔にたぶらかされたのか？ もう一辛抱しさえすれば、おん主の御顔も拝めるのだぞ。」その言葉が終らない内に、おすみも遙かにおぎんの方へ、一生懸命な声をかけた。

「おぎん！ おぎん！ お前には悪魔がついたのだよ。祈っておくれ。祈っておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。ただ眼は大勢の見物の向うの、天蓋のように枝を張った、墓原の松を眺めている。その内にもう役人の一人は、おぎんの縄目を赦すように命じた。

じよあん孫七はそれを見るなり、あきらめたように眼をつぶった。

「万事にかなない給うおん主、おん計らいに任せ奉る。」
やつと縄を離れたおぎんは、茫然と少時佇ずんでいた。
が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ跪きながら、何も云わずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉じている。

おすみも顔をそむけた儘、おぎんの方は見ようともしない。

「お父様、お母様、どうか勘忍して下さいまし。」
おぎんはやつと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その訳はふと向うに見える、天蓋のような松の梢に、氣のついたせいでござい
ます。あの墓原の松のかげに、眠っていらつしやる御両
親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへ
るのに、お堕ちになつていらつしやいましょう。それを
今わたし一人、はらいその門にはいったのでは、どうし

ても申訳がありません。わたしはやはり地獄の底へ、御
両親の跡を追って参りましょう。どうかお父様やお母様
は、ぜすす様やまりや様の御側へお出でなすって下さい
まし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては
居られません。……」

おぎんは切れ切れにそう云ってから、後は啜り泣きに
沈んでしまった。すると今度はじよあんなおすみも、足
に踏んだ薪の上へ、ほろほろ涙を落し出した。これから
はらいそへはいろいろとするのに、用もない歎きに耽って
いるのは、勿論宗徒のすべき事ではない。じよあん孫七

は、苦々しそうに隣の妻を振り返りながら、癩高い声に叱りつけた。

「お前も悪魔に見入られたのか？ 天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好い。おれは一人でも焼け死んで見せるぞ。」

「いえ、わたしもお供を致します。けれどもそれは——それは」

おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶように言葉を投げた。

「けれどもそれははらいそへ参りたいからではございま

せん。唯あなたの——あなたのお供を致すのでございませぬ。」

孫七は長い間黙っていた。しかしその顔は蒼ざめたり、又血の色を漲らせたたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の靈魂を見ているのである。彼の靈魂を奪い合う天使と悪魔とを見ているのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顔を挙げずにいたら、——いや、もうおぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢れた眼には、不思議な光を宿しながら、じっと彼を見守っている。この眼の奥に閃いている

のは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流人となれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

「お父様！ いんへるのへ参りましょう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、——みんな悪魔にさらわれましょう。」

孫七はとうとう墮落した。

この話は我国に多かつた奉教人の受難の中でも、最も恥ずべき蹟きとして、後代に伝えられた物語である。何でも彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなった時には、

天主の何たるかをわきまえない見物の老若男女さえも、悉く彼等を憎んだと云う。これは折角の火炙りも何も、見そこなつた遺恨だつたかも知れない。さらに又伝うる所によれば、悪魔はその時大歡喜のあまり、大きい書物に化けながら、夜中刑場に飛んでいたと云う。これもさう無性に喜ぶほど、悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懐疑的である。

日本文学電子図書館

おぎん

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：『報恩記』而立社

大正13年11月15日 印刷

大正13年11月25日 発行



日本文学電子図書館